

小児の同胞数に関する研究

——一人っ子の場合——

研究第3部 羽室 俊子 松島富之助
宮地 文子 三沢 貞子
湯浅 玖子
研究第7部 高橋 種昭 田中ひろみ

I 研究 目 的

終戦後の一時期を経て後の我が国における家族制度は、小家族制度、特に核家族の形態を最も合理的、かつ理想的なものであるかのごとくいわれてきている。このような考え方が一般化して来た理由の一つとして、社会的、経済的な貧困や、消費生活中心主義、個人主義の徹底などがあげられるのであるが、夫婦を中心とした生活の安定を願う意識も大きな理由となっているのではなからうか。

我が国における一人っ子家庭は年々増加の傾向を示しており、昭和42年母子衛生統計によれば¹⁾、第1表の如く昭和30年を境に第1子の出生割合が第2、3子をこえ昭和41年に至っては、総出生数の1/2強が第1子となっている。人口構成の上からも第1図²⁾の如く幼少年令層の少ない壺型の分布となって来ていることは、将来の日本を考える上でも重大な事であるといえよう。

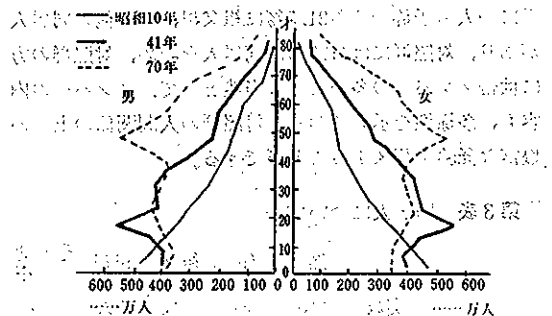
一人っ子はそれ丈で病氣であるなどといわれながら、何故一人っ子家庭が増えていくのか、又、本当に一人っ子は問題をもつ存在であるのか、を知ることが、非常に重要なことであり、やむを得ず、なってしまった一人っ子を育て、教育するための手がかりを得ることが必要であると考えらる。

我々は、今回の研究において、心身発達や性格形成の上で最も問題が発生しやすいといわれる一人っ子について、発達の実態を明らかにすると共に、背景となってい

第1表 出生順位別出生の年次推移(百分率)

年次	1950 昭25	1955 昭30	1960 昭35	1963 昭38	1964 昭39	1965 昭40	1966 昭41
出生順位							
第1児	27.1	32.5	43.6	46.5	46.9	46.7	50.9
第2児	28.0	26.2	32.6	35.6	36.4	37.5	33.8
第3児以上	44.9	41.3	23.8	17.9	16.7	15.8	15.3
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

第1図 人口の年齢構成図



る現在の家庭環境や両親の生活史、育児態度などについて調査し、一人っ子の問題を医学的・心理学的な面から明らかにしようと試みた。

II 研究 方 法

調査対象は、愛育病院で出生し、健康指導を受けたケースから、昭和33年7月1日より38年10月までに生れた児で、43年12月現在で満4才から9才の一人っ子の母親に質問紙を送付144名から回答を得た。同時にコントロール

グループとして、同時点年令の一人っ子でない第1子の母親による108名分の回答を得た。(第2表)

対象児の背景となった保健指導部来部児の概要を要約すると、東京都の中流家庭で、生活意識も高く、家業は

第2表 調査対象児

	一人っ子群	対 照 群
4 才	35名	19名
5 才	37	20
6 才	24	22
7 才	19	20
8 才	18	20
9 才	11	7
計	144	108

俸給生活者が80%をしめる。両親共に、義務教育のみのものは4%で、父親の大学卒は83%におよび、保育者たる母親も、その65%が大学又は短大卒である。地下鉄日比谷線の開通に伴い、神奈川、埼玉県からも一時間前後で

こられるようになり、居住地は広範になったが、団地居住者も多く、生活上は都会的な意識及び環境にあるといえる。健診は、生后1年間は1～1.5カ月に1回の当院保健指導部の指導を受け、その後も知能検査を含め3～4カ月に1回の指導で比較的濃厚な管理指導を受けているといえよう。

質問紙の内容は、下記に示す項目からなっている。

- 1) 家族構成
- 2) 家屋
- 3) 月収
- 4) 両親の生活史
- 5) 両親の結婚年齢、動機、妊娠出産についての印象
- 6) 子供の発育状況、問題の有無
- 7) 親の育児態度
- 8) 一人っ子にしている理由
- 9) 一人っ子の親の意識調査

Ⅲ 結

果

(1) 一人っ子の背景としての家庭環境について

1) 家族構成、特に同居人を中心に、(第3表)

いわゆる核家族は一人っ子群144名中113名78.5%、対照群108名中63名58.4%で一人っ子群に多かった。逆に一人っ子群のうち21.5%に祖父母、その他の同居人があり、対照群には41.7%に同居人を認め、対照群の方に世帯メンバーの多いことは当然として、メンバーの内容も、多様性を示しており、対照群の人間関係の上での豊富な経験を想像することができる。

第3表 同居人について

		無	有	祖父	祖母	その他※
一人っ子群	実数	113	31	13	23	16
	(%)	(78.5)	(21.5)	(41.9)	(74.2)	(51.6)
対 照 群	実数	63	45	14	29	12
	(%)	(58.4)	(41.7)	(31.1)	(64.5)	(26.7)

※ 叔父母 いとこ 使用人など

2) 家屋構造 (第4、5、6表)

現在居住し生活している場としての家屋の形態、構造広さについてみると、形態は両群とも独立家屋が7割前後、アパートが約3割で差はみとめられず、構造に関しても差はみられなかった。広さについてのみ、一人っ子

第4表 家屋形態

		独立家屋		ア パ ー ト					
		自宅	借家	マン ション	公団 住宅	民間 木造	間借	その他	
一人っ子群	実数	77	20	5	16	4	1	21	
	%	53.5	13.8	3.5	11.1	2.8	0.7	14.6	
対 照 群	実数	63	14	1	13	1	1	15	
	%	58.4	13.0	0.9	12.0	0.9	0.9	13.9	

第5表 家屋構造

		鉄筋	モルタル	木造	その他	鉄筋 +木造	N. A.
一人っ 子群	実数	42	33	65	3	0	1
	%	29.2	22.9	45.1	2.1	0	0.7
対照群	実数	31	21	52	3	1	0
	%	28.7	19.4	48.2	2.8	0.9	0

群の部屋数が、対照群にくらべて少ない傾向にあり、7部屋以上のものにいたっては一人っ子群5.6%に対し、対照群21.3%というのは、家族構成の規模にもよるものと思われた。1～2部屋は一人っ子群に20.8%、対照群13.0%で、一人っ子群にやや多い。

第6表 部屋数

		1~2 部屋	3~4 部屋	5~6 部屋	7部屋 以上	N. A.
一人っ子群	実数	30	73	26	6	7
	%	20.8	50.7	18.1	5.6	4.9
対 照 群	実数	14	48	17	23	6
	%	13.0	44.4	15.7	21.3	5.6

第7表 月 収

		5 万円 未満	5~10万 円	10万円 以上	N. A.
一人っ子群	実数	10	105	28	1
	(%)	(6.9)	(72.9)	(19.4)	(0.7)
対 照 群	実数	4	76	28	0
	(%)	(3.7)	(70.4)	(25.9)	(0)

3) 月収 (第7表)

税込の平均月収をたずねたものだが、質問の性質上、正確ではないと思われるが、参考に集計した。

両群に大きな差はなかった。

4) 両親の年齢 (第8表)

表にみる如く、両親の年齢は一人っ子群と対照群の間に大きな差はないが、両親ともに、一人っ子群の方で僅かに高くなっている。一人っ子群のうち母親が41才以上

のものは必ずしも子供の年齢が高い訳ではなく、4才5才のものが8名あった。

5) 両親の最終学歴 (第9表)

両親の最終学歴は、一人っ子群と対照群に大きな差は認められないが、父親に関し、大学卒以上が一人っ子群98名68%、対照群89名82.4%高卒以下が一人っ子群29名20.2%、対照群12名11.1%と、僅かに対照群に高い傾向をみたが、統計的有意差はみとめられない。

第8表 両親の年齢

年 令		26~30才	31~35才	36~40才	41~45才	46~50才	51才以上	N. A.
父 親	一 群 人 っ 子	実数	1	40	55	33	10	2
		(%)	(0.7)	(27.8)	(38.2)	(22.9)	(6.9)	(2.1)
	対 照 群	実数	1	37	55	14	1	0
		(%)	(0.9)	(34.2)	(50.9)	(13.0)	(0.9)	(0)
母 親	一 群 人 っ 子	実数	23	56	45	17	2	0
		(%)	(16.0)	(38.9)	(31.3)	(11.8)	(1.4)	(0)
	対 照 群	実数	22	59	24	3	0	0
		(%)	(20.4)	(54.6)	(22.2)	(2.8)	(0)	(0)

第9表 両親の最終学歴

		中 卒	高 卒	短大卒 (専門舎)	大卒以上	そ の 他	N. A.
父 親	一 群 人 っ 子	実数	7	22	9	98	0
		(%)	(4.9)	(15.3)	(6.3)	(68.0)	(0)
	対 照 群	実数	4	8	5	89	0
		(%)	(3.7)	(7.4)	(4.6)	(82.4)	(0)
母 親	一 群 人 っ 子	実数	5	81	21	30	1
		(%)	(3.5)	(56.3)	(14.6)	(20.8)	(0.7)
	対 照 群	実数	5	48	24	28	4
		(%)	(4.6)	(44.4)	(22.2)	(21.3)	(3.7)

第10表 両親の職業

		父 親						母 親	
		専門職	会社役員	公務員 会社員	自営業	その他	N. A.	有	無
一人っ子群	実数 (%)	11 (7.6)	10 (6.9)	98 (68.0)	13 (9.0)	9 (6.3)	3 (2.1)	19 (13.2)	125 (86.8)
対 照 群	実数 (%)	14 (13.0)	7 (6.5)	72 (66.6)	12 (11.1)	3 (2.8)	0 (0)	10 (9.3)	98 (90.7)

6) 両親の職業 (第10表)

父親の職業は、両群共、同傾向で差はみられなかった。母親について、有職者が一人っ子群に19名13.2%、対照群10名9.3%と統計的に有意ではないが、やや一人っ子群に多かった。

7) 一人っ子にしている理由 (第11表)

母親の年令が高いためというものが最も多く32%、次いでほしくてもできない25%、一人っ子を大事に育てたいため21%、父親の年令が高いため16%、分娩に対する恐怖15%、母親の健康上の理由14%、育児以外に生甲斐を感じるため12%の順であった。

これらの数字からは、あまり顕著な夫婦中心的傾向はみられなかったが、一人っ子を大事に育てたい、分娩に対する恐怖などの理由の裏には、自分達の生活を守る事に対する願望が含まれていると考えられる。

又、理由は、一つ丈が決定的な要因になっているのではなく併記されているものが多いのは百分率の上から容易に推察される。一つだけをあげている者として多いのは、「ほしくてもできない」の延べ数35例中22例の他特殊な例として「障害児をもった」の1例である。理由の一位にあがっている「母親の年令が高い」について、単記している者は46例中6例で、40例は多い順に「母親の健康上の理由」「分娩に対する恐怖」「母親が育児以外のことに生甲斐を感じる」「一人っ子を大事に育てたい」などの項目と併記していること、理由の第7位まではそれぞれ関連しあっており併記例が多いことがわかった。経済的問題、住宅事情は、本調査の対象者が比較的恵まれた中流生活者が大部分であり、両親の年令が30代以上が多く一応生活の基礎的安定を得ているものが多いと推定されるため8、9位となったものと思われる。

順位の上では12位であるが「子どもがきらい」の8例が、10位の「育児が重荷」と併記されたのは1例であり、「一人っ子を大事に育てたい」「父親の年令が高い」「母親の不健康」と併記されたのがそれぞれ2例で、理由の上では子供を否定的に考えているCaseが必ずし

第11表 一人っ子にしている理由

順位	理 由	延べ数	百分率 %
1	母親の年令が高い	46	31.9
2	ほしくても出来ない	35	24.3
3	一人っ子を大事に育てたい	30	20.8
4	父親の年令が高い	23	16.0
5	分娩に対する恐怖	22	15.3
6	母親の健康上の理由	21	14.6
7	母親が育児以外のことに生甲斐を感じる	17	11.8
8	経済的な問題	15	10.4
9	住宅事情	14	9.7
10	育児が重荷だったから	13	9.0
11	父親の健康上の理由	9	6.3
12	子どもがきらい {母親が 父親が	5 3	3.5 2.1
13	遺伝上の不安	4	2.8
14	障害児をもったから	1	0.7
15	夫婦関係の将来に対する不安	1	0.7
16	その他	13	9.0
	回答なし	10	6.9

も育児を拒否しているかどうかは不明であるので、今後の検討の対象にする予定である。

8) 両親の生活史

a 両親の兄弟数及び兄弟順位 (第12、13、14表)

親達自身の兄弟の人数、兄弟順位に関しては第12表の如く、父母共、一人っ子群、対照群の間に大差なく、人数に対する感じ方についても、一人っ子群、対照群共に多くてよかったとするものが35~45%、少なくてよかった、多くていやだった、は10%内外で両者に差はみられなかった。

兄弟数に対する感じ方を、「一人っ子」の両親に限定して一人しか子供を持たぬことに満足しているのか、不満と思うのかと関連させてみると、第14表に示すように父母共に自分の兄弟が「多くていやだった」「少くてよ

第12表 両親の兄弟数及び順位

			1 人	長 子	中 間 子	末 子	N. A.
父 親	一人っ子群	実数 (%)	6 (4.2)	42 (29.2)	59 (41.0)	36 (25.0)	1 (0.7)
	対 照 群	実数 (%)	8 (7.4)	39 (36.1)	39 (36.1)	19 (17.6)	3 (2.8)
母 親	一人っ子群	実数 (%)	8 (5.6)	34 (23.6)	65 (45.1)	35 (24.3)	2 (1.4)
	対 照 群	実数 (%)	7 (6.5)	21 (19.4)	54 (50.0)	24 (22.2)	2 (1.9)

第13表 両親自身の兄弟に関する感じ方 (1)

			多くてよ かった	多くてい やだった	少なく てよかつた	少なく ていやだった	そ の 他	N. A.
父 親	一人っ子群	実数 (%)	51 (35.4)	17 (11.8)	11 (7.6)	17 (11.8)	42 (29.2)	6 (4.2)
	対 照 群	実数 (%)	48 (44.4)	9 (8.3)	8 (7.4)	12 (11.1)	25 (23.2)	6 (5.6)
母 親	一人っ子群	実数 (%)	60 (41.7)	7 (4.9)	15 (10.4)	13 (9.0)	45 (31.3)	4 (2.8)
	対 照 群	実数 (%)	49 (45.4)	6 (5.6)	8 (7.4)	16 (14.8)	28 (25.9)	1 (0.9)

第14表 両親自身の兄弟に関する感じ方 (2)

一人っ子の両親		父 親			母 親		
両親の兄弟数	満・不満	一人っ子に 満足 56	一人っ子に 不満 75	回答無13	一人っ子に 満足 56	一人っ子に 不満 75	回答無13
多くてよかつた		22 (39.4)	25 (33.4)	2 (16.7)	21 (37.5)	35 (46.7)	3 (25.0)
多くていやだった		11 (19.6)	5 (6.7)	1 (8.3)	3 (5.3)	3 (4.0)	0
少なくてよかつた		6 (10.7)	4 (5.3)	1 (8.3)	9 (16.1)	4 (5.3)	2 (16.7)
少なくていやだった		3 (5.3)	12 (16.0)	2 (16.7)	3 (5.3)	9 (12.0)	1 (8.3)
そ の 他		12 (21.4)	26 (34.7)	3 (25.0)	19 (34.0)	23 (30.7)	3 (25.0)

第15表 祖父母の健否

		父 方				母 方			
		祖 父		祖 母		祖 父		祖 母	
		健	否	健	否	健	否	健	否
一人っ子群	実数	79	65	107	37	82	62	114	30
	(%)	(54.9)	(45.1)	(74.3)	(25.7)	(56.9)	(42.0)	(79.2)	(20.8)
対 照 群	実数	59	42	86	20	63	43	92	14
	(%)	(54.6)	(42.6)	(79.6)	(18.5)	(58.4)	(39.8)	(85.2)	(13.0)

かった」「少なくていやだった」から一人っ子にしているというのではなく、自分の兄弟は「多くてよかった」が、「子供は一人っ子で満足」が父母共、約40%を占めている。又、自分の兄弟は「多くてよかった」から「子供も一人っ子では不満」が約45%となっている。

このことは、両親自身の兄弟数に対する感じ方のみで自分の子供の数がきめられるものではないが、かなり影響されるものであるということがいえるとともに、自分達は「多くてよかった」が子供は一人でよいという、一見、矛盾した考えの中に、一人っ子である理由にものべた如く、自分達の生活を守ることへの願望があると推定される。

b 祖父母の健否 (第15表)

両群共、祖父母の健否は父方、母方を問わず同様の傾向を示し、祖父の健在は55~58%、祖母の健在は、74~85%である。

健在の場合の祖父母の年齢が、一人っ子群においてやや高い傾向をみたが、これが一人っ子になる因子となるか、今回の調査では例数も少なく推定の資料は得られなかった。

死亡の場合、両親がそれぞれ何才の時に祖父母が死亡したか、が両親の子供の数に対する考え方に影響しているか集計はしたが、両群に特に差がなく、影響の有無はわからなかった。

c 家庭の雰囲気

一人っ子群、対照群共、両親の育ってきた家庭の雰囲気「温い」と感じたもの、母親75~79%、父親62~69%、「冷い」と感じたもの、母親4~6%、父親4~7%、どちらともいえないが母親17%、父親20~28%で両群に差はなかった。

両親が祖父母にどのように育てられたか、溺愛から厳格を4区分して集計したが、これも両群に差はみられなかった。

すなわち一概に両親の家庭の雰囲気、小児の数が規

定されるとはいいがたいといえよう。

9) 両親の結婚から児の出生まで

a 結婚の形式 (第16表)

結婚の形式では、一人っ子群で恋愛結婚が77名53.5%は対照群の46名42.6%にやや優っている。

恋愛結婚の方に夫婦中心の生活者が多いとすれば、この結果の意味づけもその為といえるが、統計的に有意の差ではないので、他の因子とかみ合わせた上で再検討を要すると思われる。

第16表 結婚形式

		恋 愛	見 合	その他	N. A.
一人っ子群	実数	77	59	6	2
	(%)	(53.5)	(41.0)	(4.2)	(1.4)
対 照 群	実数	46	52	9	1
	(%)	(42.6)	(48.2)	(8.3)	(0.9)

b 結婚年齢 (第17表)

両群共、父親25~29才、母親20~24才が最も多いが、一人っ子群の場合には、対照群に比し、父親、母親とも高年齢での結婚が多い。

結婚年齢が高いことは、従って出産も比較的高年齢となり、「理由」の項の「年齢が高いため」と通じるものである。

c 結婚から第1子出生までの年数 (第18表)

両群とも最も多いのは結婚後1~2年で、一人っ子群35.4%、対照群37%である。第二位は対照群の1年以内30.6%に対し、一人っ子群は5年以上の23.6%で、前項の結婚年齢が、一人っ子群に高い年齢が多い傾向の上に、一人っ子群は第1子出産までの年数も長いという事実から、一人っ子である理由の一位が、「母親の年齢が高い」であることがうなづけよう。

第17表 結婚年令

			19才以下	20～24才	25～29才	30～34才	35才以上	N. A.
父 親	一人っ子群	実数 (%)	0 (0)	9 (6.3)	76 (52.7)	43 (29.9)	15 (10.4)	1 (0.7)
	対 照 群	実数 (%)	0 (0)	6 (5.6)	69 (63.9)	29 (26.7)	3 (2.8)	1 (0.9)
母 親	一人っ子群	実数 (%)	0 (0)	62 (43.0)	60 (41.7)	21 (14.6)	1 (0.7)	0 (0)
	対 照 群	実数 (%)	1 (0.9)	56 (51.9)	46 (42.6)	4 (3.7)	0 (0)	1 (0.9)

第18表 結婚から第1子出産までの年数

		1 年以内	1～2 年	2～3 年	3～4 年	4～5 年	5 年以上	N. A.
一人っ子群	実数 (%)	16 (11.1)	51 (35.4)	20 (13.8)	13 (9.0)	9 (6.3)	34 (23.6)	1 (0.7)
	対 照 群	実数 (%)	33 (30.6)	40 (37.0)	16 (14.8)	7 (6.5)	3 (2.8)	7 (6.5)

第19表 死・流産の経験

		死			産				
		無	1 回	2 回	無	1 回	2 回	3 回	4回以上
一人っ子群	実数 (%)	138 (95.7)	5 (3.5)	1 (0.7)	60 (41.7)	45 (31.3)	22 (15.3)	12 (8.3)	5 (3.5)
	対 照 群	実数 (%)	107 (99.0)	1 (0.9)	0 (0)	57 (52.7)	21 (19.4)	20 (18.5)	7 (6.5)

d. 死・流産の経験 (第19表)

死産については、両群に差はないが、流産は、一人っ子の母親の方に多くみられ、一人っ子群58.3%、対照群47.3%であった。一人っ子群の流産経験者84名のうち、自然流産は53名63.1%、人工流産39名46.5%で自然流産の経験が多く、対照群51名のうち、自然流産23名45.1%人工流産31名60.7%で人工流産は対照群に多くみられた。

死流産の経験については、一人っ子の理由の中で、母親の健康上の理由と分娩に対する恐怖の但し書に多くのべられているので、又統計上の差はないが、一つの因子であろう。

e. 妊娠、出産の状況 (第20、21表)

妊娠とわかった時の反応は両群に差はなく、父親の9割はよろこびを示し、母親の8割はうれしいと表現している。勿論、妊娠には不安、おそれ、責任感など複雑な心理を伴うものであるが、受容態度を比較したかったのである。

しかし、妊娠となったときに父親がよろこばなかったものは、一人っ子群に6名4.2%と対照群の1名0.9%よりも多くみられた。

それと比較して、出産の際の辛さということでは、一人っ子群の「もうこりこり」は30%もみられ、対照群では13%であった。又、「その時はこりこりでももう2,3

第20表 妊娠とわかった時の感じ方

		父 親				母 親			
		よろこんだ	よろこばない	その他	N. A.	うれしい	いやだ	その他	N. A.
一人っ子群	実数	128	6	9	1	112	9	22	1
	(%)	(88.9)	(4.2)	(6.3)	(0.7)	(77.8)	(6.3)	(15.3)	(0.7)
対 照 群	実数	95	1	11	1	79	6	22	1
	(%)	(88.0)	(0.9)	(10.2)	(0.9)	(73.1)	(5.6)	(20.4)	(0.9)

第21表 出産時の辛さについて

		もうこりこり	その時はこりこりでももう	これ位ならあ	その他	N. A.
		2, 3人	2, 3人	2, 3人		
一人っ子群	実数	43	68	17	16	0
	(%)	(29.9)	(47.2)	(11.8)	(11.1)	(0)
対 照 群	実数	14	79	12	3	0
	(%)	(13.0)	(73.1)	(11.1)	(2.8)	(0)

人」は頑張れると感じたもの、一人っ子群 47% 対照群 73%で、次子を希望する上の積極的姿勢は対照群に多く認められた。妊娠分娩時の異常の有無の関係は今回の調査では洩れてしまったので、今後の調査にゆずる。

f 育児の印象

出産した小児を最初にみた時の印象や、育児を通じて「楽しい」「苦しい」印象などは、両群共同様の数字であり、一人っ子としての特徴はみられなかった。

g 夫婦関係

小児の出生の前後で、夫婦関係は多少変るようで、出生後は、「あまりうまくいかない」が出生前の1/3に減り、「うまくいってない」は皆無になっている。この傾向は、一人っ子と対照群で差はみられなかった。

10) 主たる養育者(第22表)

両群共に、母が主たる養育者である場合が9割を占めている。母以外のものが養育にあたるのは、共働き家庭の場合で、祖母、父、保育園の順であるが、この点でも

第22表 主たる養育者

		母	祖母	父	祖父	その他(保育所)	N. A.
一人っ子群	実数	130	18	15	0	7	1
	(%)	(90.3)	(12.5)	(10.4)	(0)	(4.9)	(0.7)
対 照 群	実数	96	9	5	0	5	3
	(%)	(88.8)	(8.3)	(4.6)	(0)	(4.6)	(2.8)

両群での差はなかった。

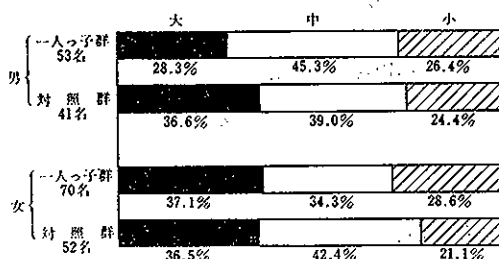
(2) 一人っ子の身体発育と健康状態について

1) 身体発育

a 体重(第2図)

対照児の身体発育を昭和35年度厚生省値によりクラス別けを行った。それによれば、一人っ子群の男児大28.3%、中45.3%、小26.4%、対照群男児、大36.6%、中39.0%、小24.4%で有意差はない。女兒についても、一人っ子群大37.1%、中34.3%、小28.6%に対し、対照群、大36.5%、中42.4%、小21.1%で差はみられなかった。

第2図

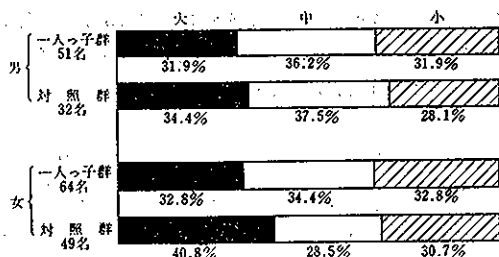


b 身長(第3図)

身長に関しても一人っ子群、対照群は同様の傾向を示しており、図の通りである。

すなわち、男女共に一人っ子群、対照群とも身長大31.9~40.8%、中28.5~37.5%、小28.1~32.8%で有意差はなかった。

第3図



第23表 健康について

		全 全 健 康	時々カゼ位 で大体健康	よく病気になる	慢 性 疾 患		
					な し	あ り	N. A.
一人っ子群	実数	26	111	7	124	7	13
	(%)	(18.1)	(77.0)	(4.9)	(86.1)	(4.9)	(9.0)
対 照 群	実数	25	76	7	89	14	5
	(%)	(23.2)	(70.4)	(6.5)	(82.4)	(13.0)	(4.6)

第24表 体質傾向

		カゼを ひきやすい	下痢を しやすい	喘息発作	自家中毒	病気がちで 手がかる	よく疲れを 訴える	N. A.
一人っ子群	実数	65	4	5	5	1	2	71
	(%)	(45.1)	(2.8)	(3.5)	(3.5)	(0.7)	(1.4)	(49.3)
対 照 群	実数	43	0	13	7	0	0	53
	(%)	(39.8)	(0)	(12.0)	(6.5)	(0)	(0)	(49.1)

すなわち、我が国では大正年間に調査された、「一人っ子の身体発育は優位なものと劣等なものの両極端が多い」との文献⁹⁾があるが、我々の調査ではその傾向はみとめられない。このことは、両群とも、愛育病院保健指導部に継続来部したものが対象となっており、遺伝的な素質の他の因子は比較的差が小さいためではないかと思われた。

2) 健康状態 (第23表)

a) 健康度

医師の健康診断の結果ではないが、表のごとき3段階のどれにあてはまるか、母親に記入させた資料によると、一人っ子群の95%対照群の93%が全く健康、又は、大概健康であった。

これまでの研究では、健康状態のよくないことを示すものが多いというが、我々の対象に関しては差はみられない。

b) 慢性疾患

慢性疾患の有るものは、一人っ子群5%、対照群13%無については一人っ子群86%、対照群82%で差はない。疾病傾向としてあげられるようなものもなかった。

c) 体質傾向 (第24表)

体質傾向の各項目について、両群比較したが、一人っ子群に特別な傾向というものはみられなかった。精神身体症状的な自家中毒、一部の喘息発作なども、一人っ子群に高いところか、対照群の方に高い割合でみられた。

(3) 一人っ子の生活について

1) 養育態度 (第25表)

a) カゼの時の扱い方
第25表の如く、「鼻カゼ、元気よく熱なし」の時、ふろに入れるもの、一人っ子群30.6%、対照群25.9%、ふろに入れず様子を見るもの、一人っ子群60.4%、対照群66.6%医者に行くもの、一人っ子群9.7%、対照群7.4%で両群に差はみられなかった。

b) 自主性の尊重

一人のできることを最後までやらせるもの、つい手伝ってしまうもの、みていられずどんどん手伝ってしまうものと分類した。統計的な有意差はないが、いくらか一人っ子群に親が手伝う傾向を感じた。

c) しつけの方針の家内一致度について

両群に差はないが、親に協力的であるものは、全体の約半数であり、祖父母や同居者が親を批判し、小児の味方に立ってしまう例が、両群共に15%前後あることがわかった。

d) 戸外あそび (第26表)

親がつかずに庭や門外に一人であそびに出しはじめた年令を調べた。昨今の交通事情から門外は出せぬとしても屋敷内である庭には、健康のためにも出してやりたいものである。表にみるように一人っ子群では対照群より出かける傾向がみられ、特に5才になるまで一人では出してもらえなかった者が5名もあったことは、保健指導を行なう者として残念であった。

戸外あそびは、友達との接触のチャンスともなるので

第25表 養育態度について

		鼻カゼの時			一人でできることは			祖父母や同居者の協力		
		かまわず ふろに入 れる	ふろに入 れず様子 をみる	医者にい く	最後まで 一人でや らせる	つい手伝 ってしま う	どんだん 手伝って しまう	しつぱに 無関心	子供に味 方し親を 批判	親に協力 的
一人っ子群	実数 (%)	44 (30.6)	87 (60.4)	14 (9.7)	80 (55.5)	60 (41.7)	4 (2.8)	7 (4.9)	22 (15.3)	68 (47.2)
対 照 群	実数 (%)	28 (25.9)	72 (66.6)	8 (7.4)	66 (61.1)	39 (36.1)	1 (0.9)	7 (6.5)	16 (14.8)	61 (56.5)

第26表 母親がつかずに庭であそびせた年齢

		1才台	2才台	3才台	4才台	5才台	N. A.
一人っ子群	実数 (%)	24 (16.7)	51 (35.4)	44 (30.6)	14 (9.7)	5 (3.5)	6 (4.2)
対 照 群	実数 (%)	22 (20.4)	61 (56.5)	18 (16.7)	4 (3.7)	0 (0)	3 (2.8)

積極的に行なうよう指導しているが、時間としては、両群共に1日約2～3時間位であった。学童期には却って1日2時間以内が多くなるが、これは放課後の戸外あそびの時間を示すものと思われる。戸外ですごす時間には両群に差はみられなかった。

2) 対人関係

a 家族に対する態度

一人っ子は、対人関係の上で問題を持ちやすいといわれているが、家族の一人々々に対する小児の「従順さ」「自主性」「親しみ」の程度を、母親はどのように感じているかを調べてみた。

(i) 祖父母(第27、28表)

祖父に対しては、従順であることについて一人っ子群は、時々反抗的になるもの53.6%、従順であるもの42.8%、対照群は逆に、従順であるもの55.8%、時々反抗的になるもの37.2%である。自主性に関しても一人っ子

群は、時々依存적であるもの53.6%、自主的であるもの23.2%に対し、対照群は、自主的であるもの53.5%時々依存적であるものが23.2%であった。すなわち、一人っ子の祖父に対する態度は、時に反抗することもあり、甘えることもあるという。いくらか我がままな態度と見受けられるのに比して、対照群は祖父に従順で、又自主的であるといえよう。したしみに関する傾向は両群に差はない。

祖母に対しては、両群共、祖父に対する一人っ子群と同様の傾向を示し、差はなかった。

(ii) 父(第29表)

父親に対する態度には、両群に大きな差はみられない。従順である者と、時々反抗的になるものが半々位あり、よくなついていて、時々依存적となる傾向は両群共全く同じである。

(iii) 母(第30表)

第27表 祖父に対して

		従 順 さ			自 主 性			し た し み		
		従 順	時々反抗	反抗的	依存的	時々依存	自主的	よくなつ ている	普 通	あまりな つかない
一人っ子群	実数 (%)	24 (42.8)	30 (53.6)	2 (3.6)	10 (17.9)	30 (53.6)	13 (23.2)	35 (62.5)	15 (26.8)	6 (10.7)
対 照 群	実数 (%)	24 (55.8)	16 (37.2)	1 (2.3)	8 (18.6)	10 (23.2)	23 (53.5)	27 (62.7)	13 (30.2)	3 (7.0)

第28表 祖母に対して

		従 順 さ			自 主 的			し た し み		
		従 順	時々反抗	反抗的	依存的	時々依存	自主的	よくなつ ている	普 通	あまりな つかない
一人っ子群	実数 (%)	29 (37.2)	45 (57.7)	4 (5.1)	23 (29.5)	37 (47.4)	12 (15.4)	60 (76.9)	15 (19.2)	2 (2.6)
対 照 群	実数 (%)	30 (44.1)	34 (50.0)	2 (2.9)	19 (27.9)	29 (42.7)	18 (26.4)	54 (79.4)	13 (19.1)	1 (1.5)

第29表 父親に対して

		従 順 さ			自 主 性			し た し み		
		従 順	時々反抗	反抗的	依存的	時々依存	自主的	よくなつ ている	普 通	あまりな つかない
一人っ子群	実数 (%)	64 (44.4)	74 (51.4)	2 (1.4)	18 (12.5)	84 (58.4)	32 (22.2)	117 (81.3)	22 (15.3)	2 (1.4)
対 照 群	実数 (%)	56 (51.9)	51 (47.2)	1 (0.9)	12 (11.1)	71 (65.7)	23 (21.3)	78 (72.3)	26 (24.0)	3 (2.8)

第30表 母親に対して

		従 順 さ			自 主 的			し た し み		
		従 順	時々反抗	反抗的	依存的	時々依存	自主的	よくなつ ている	普 通	あまりな つかない
一人っ子群	実数 (%)	38 (26.4)	100 (69.3)	5 (3.5)	25 (17.4)	88 (61.1)	25 (17.4)	128 (88.9)	13 (9.0)	1 (0.7)
対 照 群	実数 (%)	24 (22.2)	80 (74.1)	4 (3.7)	24 (22.2)	4 (3.7)	80 (74.1)	17 (15.7)	77 (71.3)	11 (10.2)

母親に対する態度については、従順さに関しては両群で差はないが、自主性に関しては、一人っ子群で、母親に依存的17%、時々依存的61%、自主的17%であるのに対し、対照群のそれぞれ22%、4%、74%は十分に有意である。したしみの程度も、一人っ子群で、よくなついている89%、普通9%あまりなつかぬ1%、対照群でそれぞれ16%、71%、10%は0.1%水準で有意である。

一人っ子をもつ母親は、母親の側からみても、子供が自分に依存的で、よくなついていると思っている訳で、この数字が客観的な判定でなく、母親がそう思っている点で、これまでもいわれているように一人っ子をもつ母の目が、絶えずその子にしばりつけになっていることを示すものと思われる。

(二) その他の家族 (第31表)

両親・祖父母以外の家族は同居例数も少ないが、傾向としては、祖父に対する態度に似ており、一人っ子は、

時々反抗的であり、又時々依存的にもなるのに対し、対照群では従順であるといえよう。

b 家族以外の人との関係 (第32表)

今回の調査では、両群に差はなく、友達関係で機会がないのは別として、友達あそびをきらうものは、一人っ子群にもなかった。表にはしなかったが、一人っ子群の方に年令が8-9才になっても特定の友達とならあそぶというものが、対照群より多かったのは、交友関係の未熟を示すものといってもよいのではなからうか。

大人との関係でも、年令を考慮しなければ、両群に大きな差はないが、一人っ子群に「誰とでもはなせる」が68%、「なれている人とならばはなせる」が31.3%で、対照群のそれぞれ58.4%、41.7%に比し、大人との関係づくりを得意とする傾向がうかがえた。年令を考慮した場合、一人っ子群では、年令が大きくなるに従い、「なれている大人とならばはなせる」が減少し、「誰とで

第31表 叔父・叔母・手伝などに対して

		従 順 さ			自 主 性			し た し み		
		従 順	時々反抗	反抗的	依存的	時々依存	自主的	よくなつ ている	普 通	あまりな つかない
一人っ子群	実数 (%)	6 (21.1)	16 (69.6)	1 (4.3)	7 (30.4)	13 (56.5)	3 (13.0)	19 (82.6)	4 (17.4)	0 (0)
対 照 群	実数 (%)	13 (52.0)	7 (23.0)	2 (8.0)	9 (36.0)	6 (24.0)	7 (18.0)	24 (96.0)	0 (0)	1 (4.0)

第32表 家族以外の人との関係

		友 達 と の あ そ び				大 人 と		
		誰とでも	特定の友達	機会がない	友達あそびを きらう	誰とでもはな せる	なれている人 とはなせる	大人とはなせ ない
一人っ子群	実数 (%)	102 (70.8)	33 (22.9)	8 (5.6)	0 (0)	98 (68.0)	45 (31.3)	1 (0.7)
対 照 群	実数 (%)	74 (68.5)	23 (21.3)	11 (10.2)	0 (0)	63 (58.4)	45 (41.7)	0 (0)

第33表 幼稚園

		入 園 は				園になれるのに要した期間		
		3 年保育	2 年保育	1 年保育	入園せず	1 週間位	1 カ月位	1 学期位
一人っ子群	実数 (%)	43 (29.9)	76 (52.8)	3 (2.1)	2 (1.4)	80 (55.5)	20 (13.8)	15 (10.4)
対 照 群	実数 (%)	23 (21.3)	72 (66.6)	7 (6.5)	1 (0.9)	53 (49.1)	27 (25.0)	14 (13.0)

もはなせる」が多くなるのに対し、対照群では、逆に年令が大きくなるに従い「なれている大人とならばはなせる」が増じてきていた。

これは、一人っ子群が、大人の中での生活が多いことや、母親との結びつきが強く、母親の対人関係などにもふみ入った生活をしていることのあらわれと思われる。

c 幼稚園について (第33表)

小児にとって、幼稚園は、家庭からはなれてのはじめての集団生活を行なう場である。一人っ子群を母親べったりの生活から子供同志の交流の場に、ある程度の規律を守る生活に、ひき出すことになる。大人になれば、多分に大人に依存的である一人っ子や、近所に全く友達のない小児に対して、我々は保健指導の際に、三年保育を推めている。そのためか、入園は、一人っ子群の三年保育30%、二年保育53%に比べ、対照群でのそれぞれ、21%、67%は、前者にいくらか三年保育が多いように思われる

が、統計的に有意ではなかった。

園になれるのに要した期間についても、一人っ子群が早くなれた感じが有意ではなかった。

3) 生活習慣の自立

一人っ子は、依頼心が強く、自分勝手に、観念的には大人の中の生活が多く、長い時間におこる知識過剰でいうことは生意気だが、実行力に欠け、自主性において劣るということは、これまで広く、そう考えられ実際にもそういう例が多かった。そしてそれは、多分に親の養育態度によって起こるものとされている。今回の調査対象児についての養育態度は、前に少し触れたように統計的な差となる程には、差はなかったのであるが、その対象児について生活習慣上の自立が、どうできているか調査した。

生活習慣の自立は、小児の特に自主的、独立生活の発達を示すと共に、親が、小児の発達を阻害することなく

正しく養育することの指標でもある。

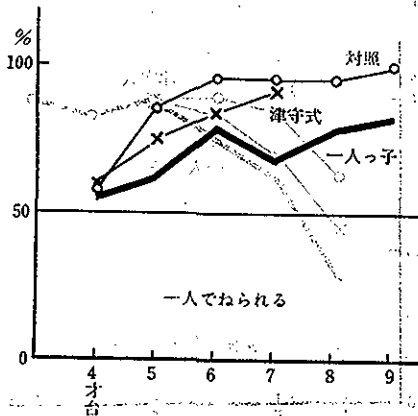
調査対象の年齢が4～9才と比較的低いので、いつでも一人でできるものをチェックさせた。

図中、津守式とあるのは、津守稲毛共著による乳幼児精神発達診断法⁹⁾における年齢毎の通過率を示すものである。いずれも生活技術的なものであり、7才になると一人っ子群、対照群との間に差はみられなくなるが、そこまでの過程が、養育態度とのかかわりで問題とされるべきであると思う。

a 就眠 (第4図)

就床から就眠までを一人ですごせるようになる年齢は対照群において5才台で津守式を超えて順調であるが、一人っ子群では6才台でようやく80%、それ以後9才になっても80%で、津守式にも対照群にも劣っている。

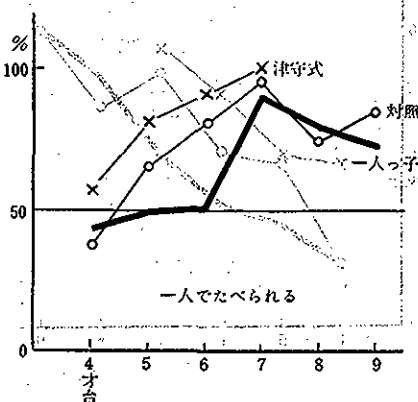
第4図



b 食事 (第5図)

食事の自立は、一人っ子群は明らかに遅れており、6才台になっても約半数はたばせてもらっていることが

第5図



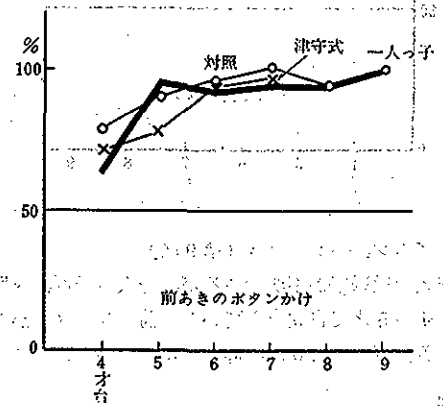
わかった。又、両群とも、8～9才で、かえって、一人でできぬ者が増しているのは、理解しがたい現象である。又、両群とも津守式に劣るのは、指導側として反省させられた。

c 前あきの服のボタンかけ (第6図)

前あきのボタンかけは、両群とも5才台で津守式をこえ、90%以上のものが、一人でできている。

小児の興味と、しなければならない回数の少ない点で、丁度うまくいったものと思われる。x

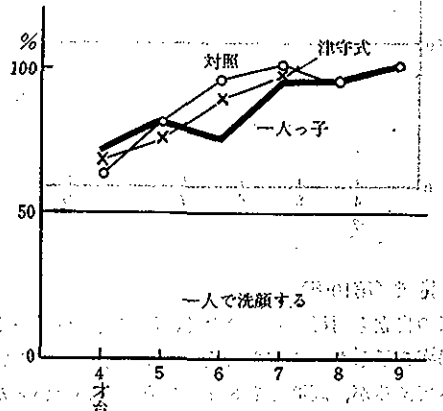
第6図



d 洗顔 (第7図)

洗顔については、両群共、津守式にそった発達を示しており、特に問題はなかった。

第7図



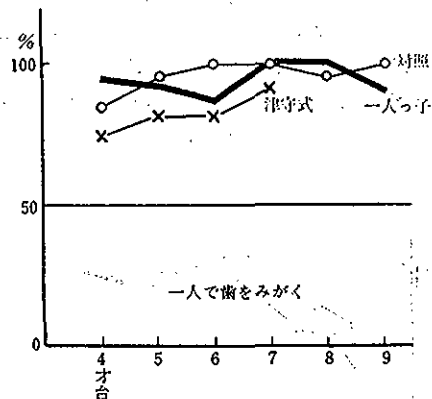
e 歯みがき (第8図)

歯みがきに関しても、両群共、津守式より早や目に自立できている様子がみられた。

尚、歯みがきに関する指導は、当保健指導部においては満1才の時に、食後の歯の衛生に注意し、2才前後で、

ハブラシを用い母親が歯を洗ってやるように、自分でやりたがる時にはさせるようにと、多少早目に手入れがはじまることになっていることを附記する。

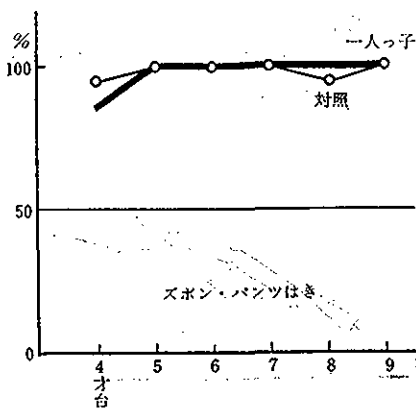
第8図



f ズボン、パンツはき (第9図)

津守式の通過率が不明であるが、一人っ子群、対照群とも、4～5才で自立できていた。前あきボタンかけと共に、着衣習慣の自立は両群での差はないといえよう。

第9図



g 排尿 (第10図)

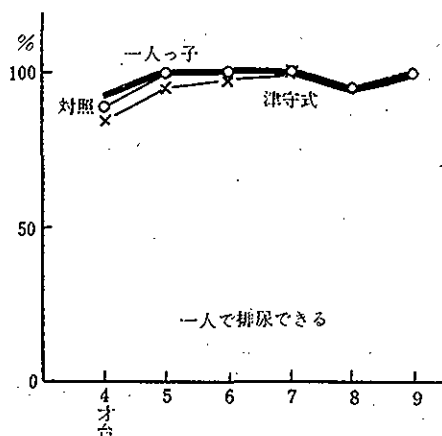
排尿の自立も両群での差はなく、津守式を少し上まわる通過率を示した。4才をこえれば100%は当然といえば当然であるが、両群とも8才で自立していない者があるのは理由不明である。

h 排便のあと仕末 (第11図)

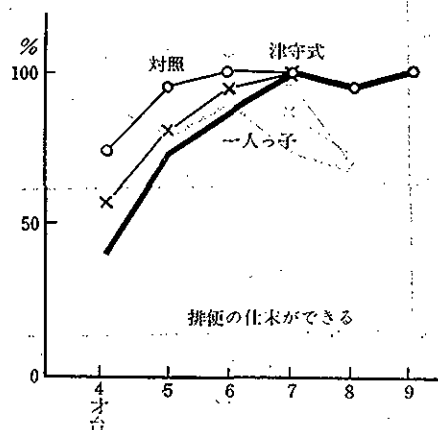
排便時のあと仕末について、一人っ子群の4才台では自立できているのは、僅か40%で、対照群同年令の63%に比し、2%水準で有意で、明らかに劣ることがわかった。

i 入浴 (第12図)

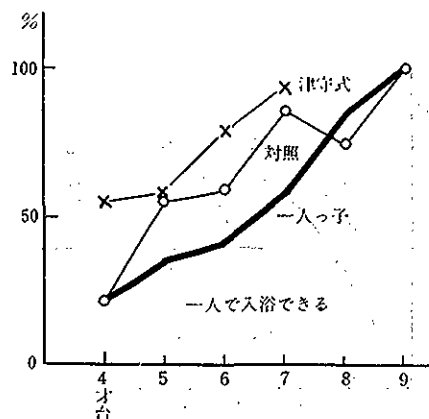
第10図



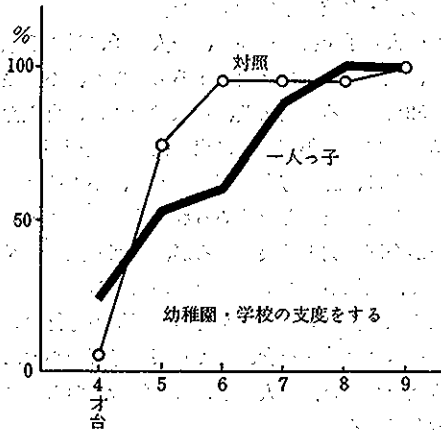
第11図



第12図



第13図



入浴に関しての津守式の要求水準は、親が一緒に入って洗いなおしても、とにかく自分の身体を石けんをつけて洗えばよいという程度の通過率であるが、我々のアンケートでは、項目をならべ、いつでも一人でできることに丸印をつけさせたので、要求水準の解釈がバラバラになった感じがあり、津守式との比較が困難となった。

それにしても、一人っ子群は、対照群にやや劣っており、親が洗ってやってしまうのが当り前になっている有様が容易に推察される。

j. 登園、登校の準備 (第13図)

普通、幼稚園には二年保育なら4才台で入園するので、いつ頃から一人で支度が出来るようになったか、又は一人でさせるようにしたかを調べた。

津守式には、同様の質問がないので、対象児を一人っ子群と対照群で比較した。対照群において4才台から5才台にかけて、自立は急激に進むが、一人っ子群では小学校入学前後まで何らかの手助けを受けていることがわかり、6才台に関しては1%水準で有意の差を示している。

(4) 一人っ子の親の意識について

IV 結

一人っ子の問題を医学的、心理学的、両面から考察することを目的に、現在の家庭環境や両親の生活史、育児態度、身体発育、対人関係、生活習慣の自立など調査した。

対象は、愛育病院で出生し、保健指導を受けた小児の中で、4才から9才の一人っ子をもつ母親に質問紙を送り、144名の回答を得たので、分析し報告した。

1) 一人っ子にしている理由は、一つだけが理由にな

一人っ子を育てている親に、フリーアンスアーで心境をのべてもらった。今回の調査における一人っ子群の総数は144名であるが、現在一人っ子であることで満足しているものは56名39%、満足していないもの75名、52%、解答なし13名、9%であった。

1) 一人っ子で満足している群について

やはりフリーに回答をもとめたのであるが、一般に一人っ子は好ましくないといわれているがその事についてどう感じているかを問うてみた。

回答を数字にまとめることはできなかったが、ほとんどのものが、過保護をさけ自主性を尊重し、一人っ子の良い面をのぼして行きたいという積極的な意見をのべている。又、一人っ子即問題児ときめつけるのはおかしい、好ましくないものにしてるのは周囲の責任で、問題児扱いをしすぎる、という意見から、全部が全部にくじけない我がままな子になるとは思わないが、育てにくい子とは感じる、とか、一応満足というよりあきらめているがどうしてもわがままになりやすく二人以上の方がよいと思う、という意見まで、ニュアンスは大分ちがう。しかし、いずれも、なってしまった一人っ子に対しては、欠点が出ないように育児し、その線にそって育てて来た、親は思っているようであった。

2) 一人っ子に満足していない群について

満足群と同じ質問に回答をしてもらったのであるが、回答の内容は満足群と大差なく、異なる点は、「厳しく自主性を尊重して育てたつもりだが、つい甘やかしてしまい、わがままでたくましさにかけた子」になっているようだと思えているものが多かった。「だから、そうならぬように努めることは出来るはずだから、具体的には、親の監督圏外に、交友範囲を広げ、経験を豊富にさせたよりのない人間になってほしい」とのべている。

いずれにしても、「現在の所、仕方がないので、早く幼稚園など集団生活に参加させて自主性をもたせるべく注意したい」とかなり意識は高いことが判った。

論

することは少ないが、記載の多い順に、母親の年齢が高い32%、欲しくても出来ない24%、一人っ子を大事に育てたい21%、など表面的にはあまり夫婦中心主義的傾向はみられない。一方、分娩に対する恐怖や育児以外に生き甲斐を感じるというものも少なくなく、潜在的にはかなり強く自分達の生活を守ること生活の重点をおいている様子がうかがわれる。

2) 親達の原家族における生活では、兄弟数が多くて

よかったとするものが35~40%、少なくともよかったとするもの8~10%、親自身が一人っ子であるものは父親の4%、母親の6%である。

3) 一人っ子の両親の結婚は、高年齢になっての結婚が多く、結婚から出産までの年数も長いものが多い。結婚後5年以上たっての出産が24%もみられた。

4) 流産経験は多く、一人っ子をもつ母の58%にあたる。(対照群47%)

5) 妊娠に関しては、父親の9割はよろこび、母親の8割はうれしいと感じているが、出産はこりごりと表現したものが、一人っ子の母の30%にみられた。(対照群13%)

6) 一人っ子の身体発育は、35年度厚生省値に比較して、特に劣るところはなかった。

7) 健康状態は良好で、慢性疾患や疾病傾向にも特徴とすべきものはない。

8) 育児態度では、年長になってからの過保護傾向がみられる。

9) 対人関係で、母親との結びつきが強く、母親に対して非常に依存的であり、強い親和感を示している。

友人関係や大人との関係では特に差はみられず、幼稚園にも比較的スムーズになれているようである。

10) 生活習慣の自立は、7才までの段階で、兄弟のある小児にくらべ、かなりのおくれがみられる。

特におくれているのは就眠、食事、排便のあと始末、入浴、登園・登校の準備であった。

11) 一人っ子を持つ母親の、一人っ子に対する意見としては、現在の状態で満足とするもの39%、不満足とするもの52%である。両者共、過保護をさげ、自主性を尊重するために早く集団の中に出たいと積極的であるが、満足群は、思う方向に育った群で、不満群はつい甘やかしてしまったことを認める群であるようだ。

以上が今回の調査結果であるが、今回の調査は対象数も少なく、地域階層も限られたものであるので、今後更に対象を拡げ、コントロール群の厳正抽出を行ないながら、ケーススタディを含めてより深く母親の心理にもふれた研究を行ない、一人っ子のもつ特徴を明らかにしていく所存である。

〔文 献〕

- 1) 厚生省児童家庭局母子衛生課編、母子衛生の主な統計(昭和42年) 17頁 S44年
- 2) 厚生統計協会、国民衛生の動向 5頁 S42年
- 3) 三田谷啓 独児の研究 心理研究第16巻 T8年
- 4) 山下俊郎 ひとりっ子の心理と教育 90~98頁 S41年
- 5) 津守 真、稲毛敦子 共著 乳幼児精神発達診断法 S36年

Study on the Number of Siblings of the Children

"An Only Child"

Dept. 3 Toshiko Hamuro

Tominosuke Matsushima

Fumiko Miyaji

Teiko Misawa

Hisako Yuasa

Dept. 7 Taneaki Takahashi

Hiromi Tanaka

For the purpose of studying the problem of "an only child" both from the physical and psychological points of view, we investigated the present family circumstances, life, history of parents, attitude toward upbringing of a child, child's physical growth, personal relation, and independence of daily life habits.

The subjects : we sent a questionnaire to each mother having an only child, ranging in age from 4 years old through 9 years old, who were picked up from among the children born in Aikku Hospital and brought for health guidance in the same hospital. We studied and analyzed 144 answers that were returned.

The Findings :

1) The reason for having "an only child" is not limited to just one reason. The reasons in order of the number most listed are : because mother gets older-32%, though mother wants another child, she doesn't conceive-24%, wants to bring up her only child with much care-21%. Superficially no couple-centered tendency is seen, but there are some mothers who have fear of delivery and who feel it worth living to do something other than nursing a child. Latently, the parents seem to lay much emphasis on holding to their own lives.

2) As for the siblings of the parents, 35~40% of the parents state that they thought it fine to have many siblings, 8~10% of the parents state they thought it good to have a few siblings, 4% of the fathers and 6% of the mothers themselves are "the only child".

3) Many parents of "the only child" married at rather older ages, many had their child long after their marriage, and 24% of the couples had their child after the lapse of more than five years.

4) It is found 58% of the mothers of "the only child" have experienced abortion (control group 47%).

5) 90% of the fathers and 80% of the mothers were glad of the pregnancy. 30% of the mothers of "the only child" expressed they had enough of giving a birth of a child (control group 13%).

6) Physical growth of "the only child" is not specially inferior comparing with the growth value reported by Ministry of Health and Welfare in 1960.

7) Health condition of "the only child" is good, no particular chronic ailment nor disease tendency is found.

8) Among the attitudes toward upbringing the child, such fact is seen that the parents tend to overprotect their child when he gets older.

9) In personal relation, "the only child" closely ties to his mother, very dependent upon her,

showing the feeling of strong affinity. No difference is seen in the relation to the company and to other adults. "The only child" seems to get used to the kindergarten fairly smoothly.

10) "The only child" shows fairly slow progress in the independence of daily life habits up to the stage of 7 years old comparing with the children having some siblings. Particularly, they lag behind in such habits as going to sleep, taking meals, cleaning after evacuation, taking a bath, and preparing for going to kindergarten or school.

11) As to the opinion of the mothers having "the only child" toward their only child, 39% of the mothers are satisfied with the present states, while 52% are to the contrary. The mothers of both satisfied and unsatisfied groups show positive attitudes toward their child, wishing to make him mingle with a group of other children at an early opportunity in order not to be overprotective and respect their child's independence. It appears that the mothers of the satisfied group see their child growing up in the direction they hope, and those of the unsatisfied group admit they have unintentionally spoiled their child.

Since the subjects for this study are small in number and the area and social strata are limited, we are going further to widen the scope of the subjects, extract the control group impartially, even go deep into the psychology of the mothers including case studies so that we may clarify more of the characteristics of "an only child".